

小原一真／咲くやこの花インタビューvol.53

小原一真(おばら・かずま)【令和7年度 文芸その他部門[写真家】】



この社会の中に埋もれてしまった声に耳を澄ませて

大阪を拠点に国内外で活動する写真家・ジャーナリストの小原一真さん。ロンドン芸術大学フォトジャーナリズム修士課程を修了し、2009年より、戦争、災害、核、パンデミックなどをテーマに、不可視化されてきた人々の記憶と声を記録してきました。英ガーディアン紙をはじめ国内外のメディアで作品を発表し、欧州の出版社から写真集を刊行するなど、国際的に高い評価を受けています。

近年は、ウクライナ侵攻の現状を伝える写真展や、大阪大空襲をテーマにした写真集、ハンセン病回復者らの物語を伝える写真展などを通して、世界と大阪をつなぐ活動を展開。アート、ジャーナリズム、教育を横断しながら、社会のなかで見えにくくされてきた人々に光を当て続けています。

取材・文／岩本和子

2011年3月、サラリーマンから写真家に転身

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。受賞のお知らせを聞いて、どんな印象を持たれましたか。

非常に嬉しく思いました。かれこれ 2009年からご縁があって住み始めた大阪ですが、こういった形で評価していただき、すごく嬉しく思いました。

小原さんは岩手県のご出身で、関東の会社に就職されて、赴任地が京都になったことで関西に来られたそうですね。

はい。その時の住まいが高槻でした。

サラリーマンから写真家へ転身されましたが、その経緯を教えてください。

高校生の時から写真家になりたいと思っていたので、写真はずっと撮っていたんですね。大学時代も、いわゆるバックパッカーみたいな形で世界中を旅しながら、写真を撮ったり、映像を撮ったりしていました。ただ、一般企業での経験も重要に感じていたので、一度就職しました。

なぜ写真家になりたいと？

今、撮っているテーマにもつながるところがあるのですが、イラク戦争と 9.11 があったのが高校 1 年生の時でした。その時に見ていた報道写真にすごく影響を受けました。遥か遠くのイラク戦争の出来事を岩手にいた私に真剣に考えさせる。その写真の力ってすごいなと思って、自分も写真を撮り始めました。基本、ずっと独学でしたが、2011 年の東日本大震災の直後に、「ニューヨーク・タイムズ」や「シカゴ・トリビューン」などアメリカの大手新聞で活躍されている写真家の高橋邦典さんの運転手をしていた、その時に勉強させてもらいましたね。震災から 2、3 週間後ぐらいの時でしたね。僕の親友の家が流されたりして、震災翌日には僕も大阪で募金活動をしたりしていたのですが、発災 5 日目には大阪から宮城県に向かいました。



大変な状況でしたね。ご実家は大丈夫でしたか。

実家は内陸の方だったので、揺れはしましたが、大丈夫でした。

高橋さんの運転手をしながら、個人的にも撮影されていたのですか？

はい。当時、お話をお伺いして、ポートレートを撮るということを毎日やっていました。震災直後の映像って、ある種、暴力的だったじゃないですか。見るのも本当に辛かったです。でも、現地と顔が見えるつながりがある中で、テレビで見ているものと、自分が頭に描いているもののギャップがあって、そう

いうところを埋めていくことは、もしかしたらできるかもしれないなと思いました。数値ではなく、より一人一人の姿が思い浮かぶような状況を遠くにいる人たちに伝えられたらと思って、それで人にお話を聞いて、人を撮っていました。

大阪・福島区で初めて展示された写真だそうですね。

はい。ギャラリーで展示をさせてもらったのはその年の6月でした。ギャラリーオーナーである写真家の赤阪さんという方が、「手書きでその人たちのことを書いたらいいんじゃないか」と提案してくださって、非常に親密性をもった表現で写真と言葉を展示させてもらいました。そこに宮城県南三陸町で被災して、被写体にもなっている僕の友人が来て、来場者の方と直接話をしてくれたりとか、そういうこともあって。明確に媒体があって、そこで伝えることは、なかなかうまくはできていなかったのですが、写真を撮る意義という意味では、大きな物語ではなく、個人の物語をより伝えるためにという思いで、撮らせてもらっていました。



そのご経験は、その後の写真家としての方向性に影響はありましたか？

東日本大震災の津波の被災エリアから、福島県に撮影に行きました。明確に違ったのが、僕が出会った方の中にも撮影されることが憚れる環境にある人たちがいらっちゃって、それは福島第一原発で働いている作業員の方だったりしたのですが、その経験は今にもものすごくつながっている部分があります。写真は可視化するものだと言いましたが、可視化できない人たちの存在に気づいたんですね。それは労働とか雇用の問題とか、いろいろ理由があるのですが、そういう人たちは声を上げたくても上げられないし、仮に被写体になりたいと思ってもなれない。そういう人たちのことを想像できる存在として伝えるにはどうしたらよいのか。それは、今現在にも通ずる問題点です。東日本大震災や福島第一原発事故からすごく大きな影響を受けています。

ロンドン芸術大学の卒業制作でウクライナへ

写真家としてはいつから活動されたのでしょうか？

2011年3月です。その時点で会社は辞めていたんですよ。その年の4月からアフリカに行こうと思って、退職する予定だった3月に震災があって。ちょっと前倒しをさせてもらって辞めさせていただいて、そのままフリーランスになりました。

ロンドン芸術大学のフォトジャーナリズム修士課程を修了されたのは、いつですか？

それは2015年ですね。

フリーランスで活動されている後に留学されたのでしょうか。

はい。(日本で進学した)大学の専攻が社会学だったので、写真学科などで勉強はしたことがなかったのですが、現場で写真を撮りながら既存の報道写真の限界にぶち当たったというか。可視化できない人たちとか、可視化できない状況がある中で、どうするんだみたいな。撮れない人がいるのに、何を撮るんだみたいなところで、より表現の幅を持つ必要があると思って、ロンドン芸大に行きました。期間は1年の修士課程でした。



ロンドン芸術大学では、どういうことが印象に残っていましたか。

様々にあるのですが、先ほどの話につながるんですけど、社会課題を表現することに対して、たくさん学ぶ機会があって、それは本当に有益でした。見る人にどういう思考を持ってもらうんだろうとか、社会課題を扱う文脈がたくさん存在していて、非常に勉強になりました。どう撮るのかということに対して、写真の構図や現場でのリアクションだけではなく、歴史的な背景や、置かれている状況など、様々なことを考察しながら、それを表現に昇華していくみたいなことです。そういうこともありつつ、卒業制作のためにウクライナにいて、その出来事も大きかったです。

ウクライナに行かれたのは2016年ですか？

2015年から16年にかけて、ウクライナにいました。チェルノブイリ原子力発電所の事故からちょうど30年を迎えようとしていた時期で、自分のプロジェクトを卒業制作にまとめるために行きまし

た。ウクライナでは 2014 年から戦争が始まっていたので、厳密に言えば当時も戦時中なのですが、僕が行った地域は平穏でしたし、そこで撮影させてもらった人たちの中には、チェルノブイリ原子力発電所で働いている若いカップルがいました。2 人とはたまたま道で出会ったのですが、二人が付き合いあって、結婚して、子どもが生まれるまで、1 年ちょっとを撮らせていただきました。2022 年にロシアによる全面侵攻が始まった時、彼女たちが住んでいるエリアはロシア軍に占領されて、僕が一番お世話になった男性は兵士になりました。今もウクライナの取材に行っています。



私は本当にニュースでしか見聞きしたことがないので、実際に現地で体験されたお話を聞くだけでも生々しさが違いますね。

友達が兵士になるとか、友達が占領された地域に住んでいるなんて想像したこともなかったので、本当にショックでした。ウクライナ戦争の侵攻が始まってからは、毎日ニュースを見ながら泣いていました。でも、何かしたいと思って、友達の一人が隣国に避難したので、そこから難民取材をはじめ、その一部を展示することから現在の取材へと広がっていきました。

被写体との縁を結んでくれる存在があってこそ

今回の贈呈理由にも、今、お話しされた活動ですとか、大阪大空襲がテーマの写真集『サイレント・ヒストリーズ』を海外の出版社から刊行されたことが取り上げられていました。写真集は、どういう経緯で大阪大空襲を取り上げようと思われたのでしょうか？

2014 年に、大阪在住で戦時中に障害を負ったり、孤児になった方々が国を訴えて裁判をしていました。僕も大阪にいて、そのことがすごく気になって、ご連絡させていただきました。2025 年で終戦から 80 年が経ちましたが、最初にお会いした方は、終戦から 70 年ぐらいの間、ずっと戦争の痛みを抱えたまま生きていらっちゃって、近年までずっと声を上げられなかった。その方のお話を聞きながら、なかなか声を上げられない人がいる福島のこととも考えましたし、そういう人たちのことを、何とか伝えることができないかと思ったんです。



海外の出版社から出版されたのは、何か意図があったんですか。

何か具体的な理由があるわけじゃないのですが、日本だけの話じゃないというか。ロンドンでも、フランスでも、スペインでも、いろんなところで大阪大空襲で被害を受けた方々の話をすごく真剣に聞いてくださって、そういう意味で、より開かれた形でいろんな方に見てもらえたらという思いはありました。戦争を扱うということ自体の難しさはありますが、本の装丁には様々な工夫が盛り込まれているのですが、戦争を扱う本としてヨーロッパやアメリカの出版社はより柔軟に表現の可能性を広げてくれたと思います。最初に出版した本もスイスの出版社にご縁があり、それからヨーロッパの新聞や展覧会を中心に活動してきた背景があり、そういう流れの中でスペインの出版社から出していただけました。

「咲くやこの花賞」の受賞には、写真を通じて世界と大阪の架け橋になってほしいという期待も込められています。今後の展望をお聞かせください。

今、大阪に住んでいらっしゃるハンセン病回復者の方にお話を聞いたり、撮影させていただいたりしているのですが、ウクライナや福島、過去の戦争が現在にあたえている影響のことも撮り続けていきたいです。まだまだ15年のキャリアしかありませんが、新たに何かをというより、今、撮影していることを長期的に続けていきたいですね。

ハンセン病の方は、どういうきっかけで出会ったのでしょうか？

きっかけはコロナ禍でした。コロナのパンデミックが始まって、コロナ差別みたいなのが始まった時に、コロナ病棟に入って、看護師さんにお話をうかがったり、撮影をしていました。その中で、隔離環境にある人々のことをもっと知らなければいけないと思って、それで、ハンセン病回復者の方々の聞き取りを始めました。大阪にもハンセン病回復者であることを名乗れない方々がたくさん住んでいらっしゃって、病気は治っているんだけど、家族や子どもたちに差別があってはいけないというので、いまだに言えない方々がたくさんいらっしゃいます。そういう状況が現在も続いている中、何かの形で伝えることが出来たらと思っています。

回復者の方との交流も続けていらっしゃって。

はい。日本には北は青森、南は沖縄まで、ハンセン病回復者の方が生活をしている療養所が現在13施

設あるのですが、大阪と沖縄、岡山にある療養所などに伺っています。

では最後に、小原さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を贈るなら、何を表彰したいと思いますか？



本来、僕が賞をもらうべきではないと思っているところがあって。僕が撮影させていただいているのは、大阪で長年活動されてきたハンセン病回復者支援、難民支援、ホームレス支援などを長い間を行ってきた人々のつながりがあるからこそです。そして、さまざまな困難に直面している当事者の方が、色々な葛藤を抱えながら、お話をしたり撮影に応じたりしてくださっています。私の写真は、そういう人々なしに存在することはないので、僭越ながら、もし賞を贈らせていただけるなら、当事者・支援者の皆様に贈りたいと思います。

